

水戸・八郷巡検 (1981年3月1日～3日)

水戸の偕楽園での梅まつりも終わり、3月に入って幾分春めいてきた感じの頃に、2年生の締めくくりとして巡検が行なわれた。今回は、人文と地形の両方からアプローチをする形で、事前に分担をして調べ、発表をして、予備知識を得た上で、この巡検をはじめた。

1日目は、まず湊線の阿字ヶ浦駅から出発して磯崎まで歩き、その間、地層の露頭や海岸の地形を観察した。ここは、那珂川左岸の那珂台地で、第4紀前半の浅海の堆積層の成田層の上に、関東ローム層が堆積している。成田層の中に、波痕の偽層が存在することからも、浅海であったことが確認できた。さらに、侵食砂丘であるヘアピンの突端を見ながら、対置海岸つまり、固い岩の所の侵食が遅れ、柔らかい所は波食が進んでできた凹凸の海岸線まで達したのであるが、私達はこの機会に初めて、地層の見分け方、地層の柱状図の書き方を、式先生と筑波大の伊藤さんの御指導のもとに学んだのである。この為、自然の方はどうも苦手という人も、今までにない理解しやすい、フィールドノートができたであろう。それから私達は、バスで那珂湊港に行き、漁業組合でお話を伺った。かつては港町として栄えていたが、今では、労使関係の問題や、2回にわたる石油ショックと、工業の発展に伴い斜陽化した。それは、漁業のように投機的なものより、安定した収入が得られる場が、近くの日立市や東海村にあり、労働力が流出し、船に乗る人がいなくなった為である。さら

に、南の大洗は、同じ漁港でも、砂浜を利用し、京浜からの海水浴客のレクリエーションの場となっていた。

2日目は、五日市巡検の時からのテーマである「関東平野の盆地」の一例である柿岡盆地を見た。柿岡は、五日市の地質的盆地や、秩父の断層盆地とは異なる馬蹄形の侵食盆地である。花崗岩の貫入を受け、花崗岩の柔らかい所が侵食されてできた盆地である。この盆地内の八郷町は、県下第2位の面積を持つ町で、第一次産業の人口が54%を占める純農村地帯であり、周辺の都市化の波に押されつつも、この体制を維持する方針で、豊かな農業を目指す改革が行なわれている。この地域は、山腹の気温の逆転現象を利用して、みかん、柿、ぶどうなどの果樹栽培や、減反政策で、奨励金をもらっての大豆・麦の栽培も盛んであると同時に、近代化で余った労働力を持つ主婦が働く家内工業も多いのが特徴である。またこの盆地内の見学の途中で、長い間の陸上での剝削作用でできた岩石扇状地(ペディメント)の観察もした。

3日目は、筑波の国土地理院・地質調査所・学園都市内の見学をし、説明も伺った。

以上のように、今回の巡検では、頭に得た地形の知識を実際に見て理解し、さらに、地元の生の声を聞き、その地区の実体や抱える問題をある程度知ることができたと思う。

(式教官指導 4年 折山由美子)